

看護学生の職業的アイデンティティ形成に関する研究（第二報） — 経年的変化から考える教育的支援 —

小藪 智子, 黒田 裕子, 合田 友美
新見 明子

A Study about Formation of Professional Identity in Nursing Students (2nd report) — Educational Supports through Their Progress in Each Grade —

Tomoko KOYABU, Yuko KURODA,
Tomomi GODA and Akiko NIIMI

キーワード：看護学生, 職業的アイデンティティ, 教育, 経年的変化

概 要

看護師のキャリア発達において、自らの職業とどう取り組むかという職業的アイデンティティの獲得は重要であり、学生時代からの支援の必要性が指摘されている。今回看護学生の職業的アイデンティティについて尺度を用いて測定し、その経年的変化を項目毎にとらえることにより、教育的支援を検討した。その結果、技術の向上と知識の習得の動機が、「憧れ」、「学習の困難感」、「よい看護を提供するため」など学年毎に違うことがわかった。そこで、職業的アイデンティティを獲得するためには、それぞれの時期にあった指導を行うこと、看護学臨地実習において承認を繰り返し行い学生自身が適切な看護が提供できている自分を認識できるように支援すること、また学生がアイデンティティの揺らぎを体験している時はそのことに向き合えるよう個別の支援を行うことなどが考えられた。

1. 緒 言

看護の質を向上させるためには、看護師のキャリア発達が求められる。しかし近年、新卒看護師が、看護基礎教育終了時点の能力と看護現場で求められる能力のギャップを原因に、早期に離職することが社会的問題になっている。2004年に日本看護協会が行った調査では、新卒看護師の離職率は9.3%で11人に1人が離職しており¹⁾、キャリアの積み重ねがないまま離職していく看護師が多くいることが明らかになった。

看護領域で用いられる看護職でのキャリアとは、単なる職業経歴というよりも、個人の職業生活全体を通して自らの能力の向上を目指す自己実現の過程を意味している²⁾。この職業を通じた自己実現は、看護という職業に対してどのように自己をコミットさせていくかという、職業的アイデンティティの獲得と密接に関

係している。高橋²⁾は、アイデンティティの伴わないキャリアの実現はありえないと述べており、キャリア発達において、自らの職業に対してどう取り組むかという職業的アイデンティティの獲得は重要である。

看護学生のように、大学あるいは専門学校入学の時点で、将来の職業がほぼ限定されてしまう青年期の職業アイデンティティの研究は、教育的観点から見ても非常に重要であり、その職業に関する専門知識・技術の教育にとどまらず、その職業を自分のアイデンティティの中核に組み込んでいけるようなアイデンティティ形成のための教育が求められる³⁾。

これまでの研究では、看護学生の職業的アイデンティティは、入学時から卒業時にかけて低下や揺らぎがあること⁴⁻⁷⁾進路決定プロセスや教育課程により違いがあること⁸⁻¹⁰⁾などが明らかにされ、看護学生の職業的アイデンティティ形成の支援の必要性が指摘されている。しかし、職業的アイデンティティに含まれる各要素の経年的変化を考察した先行研究は見当たらず、具体的な教育的支援に関する研究成果は少ないのが現状である。

(平成19年10月10日受理)

川崎医療短期大学 看護科

Department of Nursing, Kawasaki College of Allied Health Professions

そこで本研究の第一報¹⁾では、看護学生の職業的アイデンティティを形成していく上で、その基盤と考えられる対人関係における援助能力を調査した。そして今回は看護学生の職業的アイデンティティ形成の教育的支援を検討することを目的として、看護学生の職業的アイデンティティの経年的変化を調査し、第二報とした。

2. 研究方法

(1) 調査対象

2003年、2004年にK短期大学看護科に入学した学生のうち、3年間継続して調査できた133人(72.3%)を対象に調査した。

(2) 調査方法

看護職の職業的アイデンティティを波多野ら⁴⁾の開発した尺度を用いて測定した(表1)。これは、職業人としての自己向上(2項目)、職業人としての自尊感情(2項目)、職業的自己関与(6項目)、職業への肯定的イメージ(2項目)の4つのカテゴリー、12項目からなり、「非常にそう思う」から「絶対にそう思わない」の5段階のリカートスケールで回答を求めた。発達過程をみるために縦断的調査とし、1年次、2年次、3年次卒業前の計3回調査を行い、合計点の平均値及び各項目の平均値を学年毎に算出し、t検定を行った。解析にはSPSS 14.0 Jを使用した。

(3) 倫理的配慮

各対象者に対して、研究目的及び内容を説明し、この調査は自由意志による参加が可能であり、この調査

結果は個人の評価に関わらないことおよび研究成果の公表において、個人情報の機密は保持されることを説明し、同意を得た。

3. 結果

(1) 職業的アイデンティティ合計得点(図1)

1年次は 46.3 ± 6.5 と2年次、3年次に比べ有意に高く($p < 0.01$)、2年次は 42.6 ± 6.1 、3年次は 42.3 ± 6.2 と学年進行に伴い低下した。2年次に比べ3年次は若干得点が低い、有意差はなかった。

(2) 各項目の特徴(図2)

3年間を通して得点が高い項目は「もっと看護の技術を磨きたい」「もっと看護の勉強がしたい」「看護の仕事に誇りを持っている」「将来看護師の仕事長く続けたい」であった。逆に得点が低い項目は「看護師と

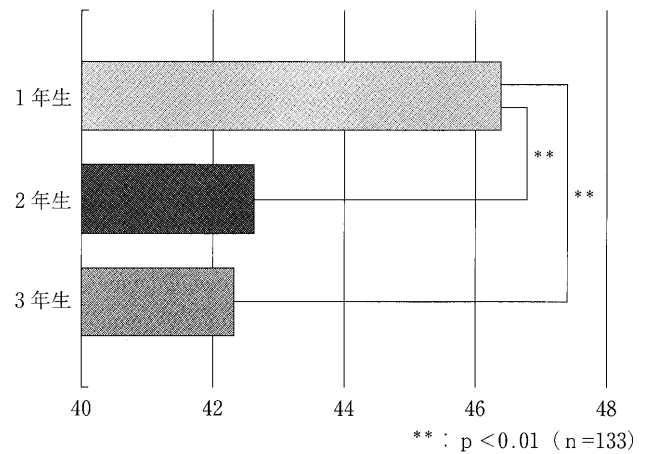


図1 アイデンティティ尺度の合計得点の学年による比較

表1 職業的アイデンティティ尺度の質問項目およびカテゴリー⁴⁾

項目	カテゴリー
1. 将来看護師の仕事長く続けたい	職業的自己関与
2. 看護の仕事は私に適している	職業的自己関与
3. もう一度職業を選ぶとしたらまた看護の仕事を選ぶ	職業的自己関与
4. 高校生に「看護師になりたいが」と相談されたら勧める	職業への肯定的イメージ
5. 看護の仕事に誇りを持っている	職業人としての自尊感情
6. もっと看護の勉強がしたい	職業人としての自己向上
7. 看護の道を選んだことに満足している	職業的自己関与
8. 看護師として仕事することに自信がある	職業人としての自尊感情
9. もっと看護の技術を磨きたい	職業人としての自己向上
10. 私の子どもが看護師になりたいといったら勧める	職業への肯定的イメージ
11. 看護の仕事は私の能力をいかせる	職業的自己関与
12. 看護に生きがいを感じている	職業的自己関与

して仕事することに自信がある」「もう一度職業を選ぶとしたらまた看護の仕事を選ぶ」「看護の仕事は私に適している」であった。

(3) 各項目の学年別推移（図2）

各項目の学年の比較では、すべての項目において1年次で得点が高かった。そして1年次と2年次を比較すると上昇した項目はなく、すべて2年次において有意に低下していた（ $p < 0.05$ ）。

2年次から3年次にかけて、上昇した項目は「看護の仕事は私の能力をいかせる」（ $p < 0.01$ ）「看護の仕事は私に適している」（ $p < 0.01$ ）「看護の道を選んだことに満足している」「看護師として仕事をするに自信がある」「看護に生きがいを感じている」であった。逆に低下した項目は「もっと看護の技術を磨きたい」（ $p < 0.05$ ）と、「私の子どもが看護師になりたいといったら勧める」（ $p < 0.05$ ）、「高校生に『看護師になりたいが』と相談されたら勧める」（ $p < 0.05$ ）であった。1年次と3年次では「看護の仕事は私の能力をいかせる」と「看護の仕事は私に適している」では差はなかったが、その他全ての項目で有意差を認めた（ $p < 0.01$ ）。

4. 考 察

(1) 学年毎の合計得点の推移

学年毎の合計得点の推移は、先行研究と同様に1年次が最も高かった^{4,7)}。1年次の学生は、優しい、親しみやすい、穏やかなといった一般的な看護職のイメージを持ち¹²⁾、その看護師像と自分を適合させ、職業的アイデンティティが高くなっていると考えられる。つまりこの時期は、波多野ら⁴⁾のいう現実を正しく認識できていない、「ロマンチックな職業の憧れの段階」といえる。

2年次になると合計得点は低下していた。この時期のK短期大学のカリキュラムでは、さらに専門的な看護を学んでおり、机上での学習は深まっているが、実際の患者をイメージしながら看護を理解することが難しい。そのため、中新ら¹³⁾が1年終了時の看護学生は学習量の多さや学習内容の理解の難しさから、自分の能力への不信感が強くなっている、と述べているように、自分の知識とイメージする看護師像を融合させることが難しく、職業的アイデンティティが低下したと考える。

K短期大学では3年次に半年以上続く看護学臨地実習を行っている。学生は看護学臨地実習を通し、看護

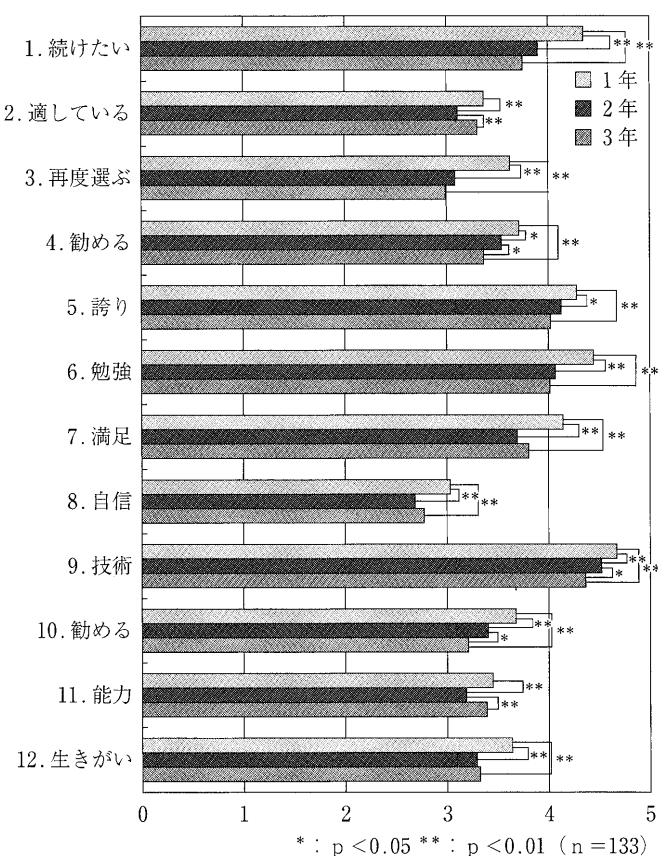


図2 アイデンティティ尺度の各項目の学年による比較

師には様々な能力が必要なことに気付かされ、次々と自己課題が明確化し、達成感を味わう機会が少ないため¹⁰⁾、自己と職業との一致感を得られず、職業的アイデンティティは2年次と同様に低いままであったと考える。

(2) 職業人としての自己向上・自尊感情

「もっと看護の技術を磨きたい」「もっと看護の勉強がしたい」「看護の仕事に誇りを持っている」は全ての学年で4点台と得点が高く、常に技術の向上と知識の習得を目指していることがうかがえる。また職業的アイデンティティが揺らぐ中でも、看護職に誇りを持っている学生が多いことが明らかになった。

しかし、合計得点の推移から、看護に対する意識が学年進行に伴い変化することが分かり、3年間同じ気持ちで自己向上のカテゴリーの得点が高いのではなく、学年によりその動機が違うのではないかと考えられた。つまり1年次には職業への憧れから、2年次には学習の困難さから、3年次には実際の看護を体験し患者の現状に合わせた看護の必要性を感じ取れたことから、技術の向上、知識の習得を目指していると考え

それに対し「看護師として仕事をすることに自信がある」は、全ての学年で最も得点が低く、看護学生の自信のなさがうかがえた。看護学生は対象となる患者にひとりで看護実践をする機会がほとんどないことや、同じ看護技術においても対象が違えばその方法や配慮の仕方等細やかな相違に対応していくため、看護をすることに自信を持つことは難しく、得点が低いのは納得できる結果である。しかし、2年次と比べて3年次はわずかに上昇したことから、看護学臨地実習の体験の中で自己成長を感じ、少しずつではあるが看護に対する自信が芽生えていると思われる。

アイデンティティは、発達初期の一貫した経験から得られた基本的信頼に基づき、自分自身の能力を信頼するという「自己信頼」の感覚に支えられている。第一報でも報告したように看護学生の基本的信頼感の獲得を援助することが、職業人としての自尊感情を高めるために重要な支援である。

(3) 職業への肯定的イメージ・職業的自己関与

2年次と3年次を比較すると、「看護の仕事は私の能力をいかせる」「看護の仕事は私に適している」「看護の道を選んだことに満足している」「看護に生きがいを感じている」は上昇している。谷垣ら¹⁴⁾が述べているように、看護学臨地実習中の看護学生にとって、自分が受け入れてもらっているという実感を持つことは重要なことである。たとえ厳しい現場を認識した後であっても、患者から感謝されたり、看護師や教員から認められたりする体験を通して、看護ができそうな自分を感じていると考える。この体験は、仕事への誇り、自信にもつながるため、職業人としての自尊感情の得点にも影響を与えたと考えられる。

しかし「将来看護師の仕事長く続けたい」「もう一度職業を選ぶとしたらまた看護の仕事を選ぶ」の質問項目は低下しており、今の自分は看護ができそうだと思っても、将来の自分のことまでは考えられない、アイデンティティの脆さがうかがえる。さらに「高校生に看護師になりたいがと相談されたら勧める」と「私の子どもが看護師になりたいといったら勧める」の2項目は、学年の進行に伴い有意に低下した。これは、学年が進むにつれて、看護の厳しさ、責任の重さなどの現実を知り、安易には勧められないと思うようになったためと考えられる。これらの項目は看護をして良かった、看護は楽しいと思える体験が重なることによって上昇すると考えるが、半年にわたる看護学臨地実習では、看護をして良かったと思える体験ばかりでな

く、失敗や自分の未熟さを感じる体験も多いため、看護職に対して肯定的なイメージばかりではないことがうかがえる。

(4) 教育的支援

岡本¹⁵⁾は、青年期に獲得されたアイデンティティは揺らぎと立て直しのプロセスを繰り返し、ラセン式に発達・成熟していくアイデンティティのラセン式発達モデルを示した。そして、アイデンティティの見直しを行い、自分の生き方の模索を行った人はより深い自己安定感や、自己肯定感を獲得していると述べている。これらのことから、学生の職業的アイデンティティの低下は、アイデンティティの発達のためには重要なことであると考えられる。

看護師を目指す学生がイメージと異なる厳しい現実を認識したことにより、自分と看護職とを適合できないアイデンティティの危機を体験し、それを乗り越えようと努力する過程は、看護職の職業的アイデンティティをより強固なものにするであろう。したがって、1年次から2年次にかけて職業的アイデンティティが低下しないように支援するのではなく、2年次に下がった職業的アイデンティティを引き上げる教育的支援が重要である。

まず、全学年を通して学習ニーズが高い技術の向上と知識の習得については、学年によりその動機が異なることを理解した上での指導が必要である。学習内容が多様化し、学習量に追われる2年次には、不安や焦りといった気持ちに寄り添い、現在の努力が将来に続くことを認識できるような指導を行うことが重要である。そして、看護学臨地実習で看護の実際を体験している3年次には、患者の満足度を確認しながら、実施した看護を自己評価する機会を設け、よりよい看護を実践できるよう指導を行うことが大切であると考えられる。

また、看護学臨地実習において患者や家族から感謝されたり、看護師や教員から認められたりする体験が職業的アイデンティティを強めることから、機会ある毎に、上手く実践できているところ、努力しているところを認めたり、学生が気付いていない患者や家族のよい変化をフィードバックするなどして、適切な看護が提供できつつある自分を現実として認識できるように伝える、肯定的支援が求められる。

さらに学生がアイデンティティの揺らぎを体験している時は、そのサインをキャッチして気持ちを支え、看護学臨地実習においてつまずきのあった場面を一緒

に考えるなど、そのことに向き合い次に進んでいけるよう、個別の支援が必要であろう。

そして、看護学生は青年期にあり、自分は何者か、自分はどうかあるべきかを模索する個としてのアイデンティティ確立という発達課題を持ち合わせている。これには基本的信頼感が重要であるが、本研究の第一報では基本的信頼感が十分に備わっていない学生も看護を志していることが明らかになっている¹¹⁾。看護職は人間を相手とする職業であり、対象者とのかかわりの中で、自己のアイデンティティが揺るがされる場面も多く、職業的アイデンティティと同時に個としてのアイデンティティ確立の支援が必要である。

5. 結 論

看護学生の職業的アイデンティティを測定し、その学年別推移を項目毎にとらえることにより、教育的支援を検討した。その結果、合計得点は先行研究と類似していたものの、項目やカテゴリーには特徴がみられた。その特徴から看護学生の職業アイデンティティ形成のための教育的支援は、①学年により技術の向上と知識の習得の動機が違うことを理解したうえで、それぞれの時期にあった指導を行うこと、②看護学臨地実習においては、適切な看護が実施できているところ、努力しているところの承認を繰り返し行うこと、③看護学生がアイデンティティの揺らぎを体験している時は、そのことに向き合えるよう個別の支援を行うことなどが考えられた。

6. 文 献

- 1) 日本看護協会：看護教育改正の必要性について，2007. 7.27. <http://www.nurse.or.jp/home/opinion/teigen/2007pdf/sanko20070412.pdf>
- 2) 高橋照子：キャリア論とアイデンティティ論—看護学が取り組むべき課題—，インターナショナルナーシングレビュー21(2)：36—40，1998.
- 3) 岡本祐子：アイデンティティの研究の展望VI，「青年期のアイデンティティ」 鍾幹八郎編，初版，京都：ナカニシヤ出版，pp. 282—292，2002.
- 4) 波多野梗子，小野寺杜紀：看護学生および看護婦の職業的アイデンティティの変化，日本看護研究学会雑誌16(4)：21—28，1993.
- 5) 濱野香苗：4年生看護学生の自我同一性の経年的変化，日本看護学教育学会誌14：100，2004.
- 6) 土屋八千代：看護短期大学生の職業同一性地位とストレス対処行動の経年的変化，日本看護研究学会雑誌26(3)：417，2003.
- 7) 野田貴代，出口睦雄：看護学生の学年進行に伴う職業的アイデンティティと関連要因の変化，日本看護科学学会学術集会26回講演集：415，2006.
- 8) 河村彰美，藤田淳子，種池礼子：看護学生の看護師志望理由・学習進度が看護婦のアイデンティティ形成に及ぼす影響，看護展望25(9)：105—110，2000.
- 9) 落合幸子，本多陽子，落合良行，藤井恭子，塚本信宏，大橋ゆかり，野々村典子，黒木淳子：医療系大学への進路決定プロセスと入学後の職業的アイデンティティとの関連，医学教育37(3)：141—149，2006.
- 10) 田洪あづさ：看護学生における職業的アイデンティティの形成—学校生活における諸要因との関連—，日本看護学教育学会誌14：96，2004.
- 11) 新見明子，黒田裕子，合田友美，小藪智子：看護学生の職業的アイデンティティ形成に関する研究(第一報)—看護学生の対人援助能力—，川崎医療短期大学紀要26：15—21，2006.
- 12) 江口 瞳，寺澤孝文：看護師イメージの因子構造と学年進行による看護師イメージ得点の変化，日本看護研究学会雑誌29(4)：71—80，2006.
- 13) 中新美保子，玄馬康子，大場広美，武田利恵，谷岡哲也：看護学生の自己受容性に関する縦断的变化，ナースエデュケーション3(1)：102—111，2002.
- 14) 谷垣静子，松田明子，宮脇美保子：教員は学生にケアリング教育ができてきているのか，Quality Nursing 9(12)：1055—1059，2003.
- 15) 岡本祐子：アイデンティティ論からみた生涯発達とキャリア形成，組織科学33(2)：4—13，1999.